



「校歌」物語

白糠高校④ Jポップに通じるメロディー

校歌を作曲した大川八朗さんは東京出身の作曲家。1901年(明治34年)生まれ、東洋音楽学校(現東京音楽大)に学び、クラシック、民謡、歌謡曲、フォークなど幅広いジャンルの楽曲を編曲し、楽譜を出版した。東京楽譜出版社の取締役も務めた。江口榛一さんとのコンビで多くの校歌を残している。

分かった範囲で最も古かったのは、水戸市立第二中の校歌。51年11月制定なので江口さんが北海道に渡る直前に書いたのだろう。52年の白糠高は恐らく2作目。53年には島根県立横田高の校歌を作った。同校の記念誌には江口さん、大川さんの手紙が掲載されている。歌い方のアドバイスなどを丁寧に記した手紙からは誠実な人柄がにじみ出る。その後、2人で秋田・千葉・茨城など各県の小中学校の校歌を手掛けていった。

「父が大川八朗さんの名をよく口にしている、大変お世話になった作曲家の先輩だということ」を記憶しています。劇団四季でも活躍したミュージカル俳優の沢木順さん(神奈川県在住)が教えてくれた。父とは、後志管内真狩村出身の作曲家八洲秀章さん(1915〜85年)。「あさみの歌」など昭和の名曲で知られ、校歌も複数作った。世代を超えて歌われる校歌は、昭和歌謡の系譜なのかもしれない。

白糠高には大川さん直筆の楽譜が残る。音楽教諭の伊藤将史さん(27)は「Jポップと同じ、Aメロ・Bメロ・サビ」という構成の曲なので、今の生徒たちも歌いやすいメロディーです」と解説してくれた。

校歌は3番までだが、1年生の音楽の授業では、生徒がそれぞれの「4番」の作詞に挑戦する。コロナ禍で歌う時間が十分とれなかった本年度は、音声合成ソフトを使って曲に歌詞を乗せる体験もした。実験的な授業ができるのも少数だからこそ。「ボカロ風」とも呼ばれる合成音声の4番も聞いてみたい。



◇訂正 6日の「校歌」物語の記事で、棚野孝夫・白糠町長のコメントに「図書館の踏切」とあるのは「根」

室線の踏切」の誤りでした。記者の加筆による誤りです。おわびして訂正します。



「校歌」物語

白糠高校⑤ 「久遠」の探究 町営塾で支援

釧路管内は現在1学区。管内のいずれの高校でも受験することができる。釧路市内の高校も定員割れを起こす少子化の時代だ。「この高校にキラリと光る授業や指導、制度がないと進学先に選ばない」。福田敏憲教頭はそう説明する。白糠町と連携し、多くの取り組みを行っている。

1年生は「ベシックスタディ」という中学までの学び直しの授業がある。3年間を通じた総合的な探究の時間では、生徒たちが校外に出て、地元の人から産業や歴史を学ぶ。人口減や過疎化に悩む地域で活躍する人材を育てる狙いだ。

校舎内には、生徒専用の町営学習塾「久遠塾」があり、無料で利用できる。校歌の歌詞の言葉「久遠の門」が塾名の由来。2021年度からは給食を無料にした。検定試験の受験料補助などもある。これらは町の予算でまかなわれている。

道立高を町が強力に支援できるのは、町内に一つしかない高校だからこそ。「子育て応援日本一」を掲げる棚野孝夫町長(72)は「幼児から高校まで一貫して地域全体で育てる」と強調する。

小規模校の弱みと言われるのは部活動だ。棚野町長が所属したサッカー部も、男子柔道の五輪銅メダリスト越野忠則さん(55)を輩出した柔道部も今はない。

国際武道大(千葉県)柔道部監督を務める越野さんに思い出を聞いた。「1学年7学級あったけど柔道部は弱小でしたよ。部員3人になった時期もあった」と笑った。中学、高校と指導者に恵まれて才能を開花させ、東海大(神奈川県)に進んだ。

大学で指導者に言われた。「おまえが結果を出せれば、同じような環境の後輩たちに夢や希望を与えられる」。それが柔道を続けるモチベーションになった。91年世界選手権金メダル、92年バルセロナ五輪で銅メダル。「結果」は出した。

帰省するたび、母校の生徒数が減るのを聞き、寂しく感じていた。

後輩たちにこう呼びかける。『夢や目標を忘れないでほしい。どんな環境だって諦めないことが大切なんだ』



国際武道大の研究室でオンラインインタビューに応じ、高校時代の思い出を語る越野忠則さん